

ポジティブボディイメージを測定する BAS-2 の日本語版作成

生田目 光 宇野 カオリ 沢宮 容子 筑波大学

Development of Japanese version of the Body Appreciation Scale-2

Hikari Namatame, Kaori Uno, and Yoko Sawamiya (*University of Tsukuba*)

This study developed a Japanese version of the Body Appreciation Scale-2 (BAS-2), a measure for a comprehensive assessment of positive body image, and investigated its reliability and validity. The results of confirmatory factor analysis showed that, like the original version, the Japanese BAS-2 had a one-factor structure and invariance across gender. Body appreciation scores had good internal consistency, test-retest reliability, and construct validity. Furthermore, the scale exhibited incremental validity by predicting psychological elements (disordered eating, self-esteem, and satisfaction with life) above and beyond body dissatisfaction. Thus, the BAS-2 is suitable for the assessment of positive body image in the Japanese population.

Key words: body appreciation, positive body image, Japan, validity, psychometrics.

The Japanese Journal of Psychology

2017, Vol. 88, No. 4, pp. 358–365

J-STAGE Advanced published date: May 10, 2017, doi.org/10.4992/jjpsy.88.16216

ボディイメージは、身体に対する自己の知覚や態度（すなわち、思考や感情、行動）を含む複雑な多次元的構造をなす（Cash, 2002; Cash, Jakatdar, & Williams, 2004; Thompson, Heinberg, Altabe, & Tantleff-Dunn, 1999）。当然、そこにはポジティブボディイメージもネガティブボディイメージも包含されるわけだが、従来の研究では、身体不満足感や身体知覚の歪みなどのネガティブな側面ばかりに焦点が当てられてきた（Cash, 2002）。そのため、関連する評価指標もネガティブな態度を測定するものが多く開発され（Avalos, Tylka, & Wood-Barcalow, 2005）、ボディイメージに関する適応的な側面を測定する指標はほとんど開発されてこなかった。

ところが、近年、海外ではボディイメージのポジティブな側面が注目され、その測定指標の開発が進められている。例えば、Secord & Jourard (1953) は身体の様々

な部位や外観に対する満足度を測定する Body-Cathexis Scale を開発しており、日本においても当該尺度を参考にして、身体満足度尺度（柴田, 1990）が作成されている。また、Franzoi & Shields (1984) は自己の身体の様々な側面をどの程度好んでいるかを測定する Body Esteem Scale を開発した。さらに、Brown, Cash, & Mikulka (1990) は Multidimensional Body Self-Relations Questionnaire を開発しており、その appearance evaluation 下位尺度では、どの程度自分が外見的に魅力的であると考えているかを測定することができる。ただし、これらの尺度は、個人の外見に対する満足度のみ測定している。ポジティブボディイメージは、身体満足感や外見への好意的な評価にとどまらぬ多次元的概念である（Tylka & Wood-Barcalow, 2015b）ため、前述の尺度はポジティブボディイメージの測定尺度としては不十分である。

上記のような尺度の存在を踏まえた上で、より包括的なポジティブボディイメージ測定尺度であると考えられるのが、Avalos et al. (2005) による Body Appreciation Scale（以下、BAS とする）である。Body Appreciation（以下、ボディ・アプリシエーショ

ンとする)は、自己の身体を受容し、好意的に評価し、尊重しながら、メディアによって奨励される外見の理想像を美の唯一の形として受け入れないことと定義される (Tylka & Wood-Barcalow, 2015a)。ただし、BAS には以下の4点において改善の余地が認められた。第一に、いくつかの項目の因子負荷量が他の項目と比べて低かったことである(例:「自分の身体の欲求に注意を払っている」、「私の価値は、私の体型や体重に依存しない」)。第二に、インドネシア (Swami & Jaafar, 2012) やマレーシアと中国 (Swami & Chamorro-Premuzic, 2008)、ブラジル (Swami, Mada, & Tovée, 2012) などの非西洋文化圏において、原尺度の1因子構造とは異なり、2因子構造となったものの、第2因子の因子負荷量は低く、解釈が難しいことである。第三に、一部の項目内容が男女それぞれ別個になっており(「女性の非現実的なやせ像」と「男性の非現実的なたくましき像」)、データ収集の際に負担になることである。第四に、幾つかの項目は、ある特定のネガティブボディイメージを規範的とみなし、これらのネガティブボディイメージの不在によってポジティブボディイメージを測定しようとしている項目(例:「欠点があっても自分の身体をありのままに受け入れる」)が含まれていたことである。上記4点を踏まえてBASは改訂され、1因子10項目で構成されるBAS-2 (Tylka & Wood-Barcalow, 2015a)が作成された。BAS-2は、適応と関連する様々な指標と有意に相関することが明らかになっている。例えば、高いボディ・アプリシエーションを示す人ほど、自尊心や自己の外見に対する評価が高く、適応的な食行動をとる傾向にあり、身体不満足感や食行動異常傾向が低く、メディアイメージを内在化しにくい (Tylka & Wood-Barcalow, 2015a)。また、ボディ・アプリシエーションが高いと抑うつが低く、不健康なダイエット行動をとりにくいとの報告もある (Gillen, 2015)。さらに、メディアイメージと接触することによって生じるネガティブな影響を緩和するとの示唆もある (Andrew, Tiggemann, & Clark, 2015; Halliwell, 2013)。

上述の通り、ボディ・アプリシエーションは、様々な領域における適応と関連する。そのため、ボディ・アプリシエーションを測定する尺度を開発すれば、不適応の予防や適応の促進に貢献できると考えられる。したがって、ボディ・アプリシエーションを測定する指標を開発することは、大きな意義をもつ。

BASは、原尺度である英語版の他、スペイン語 (Lobera & Rios, 2011)、ドイツ語 (Swami, Stieger, Haubner, & Voracek, 2008)、ペルシャ語 (Atari, Akbari-Zardkhaneh, Mohammadi, & Soufiabadi, 2015)、中国語 (Swami, Ng, & Barron, 2016) など多くの言語に翻訳され、広く世界的に利用されている。しかし、わが国に

おいては、日本語版BASやポジティブボディイメージを測定するその他の尺度は作成されていない。

そこで、本研究では、Tylka & Wood-Barcalow (2015a)のBAS-2を翻訳し、その信頼性と妥当性を検証することを目的とする。具体的には、研究1において項目の日本語訳と因子構造の確認、内的整合性、構成概念妥当性、増分妥当性の検討を行う。次に、研究2において3週間間隔で測定する再検査法により、日本語版BAS-2の再検査信頼性を検討する。

研究 1

目的

日本語版BAS-2を作成し、その因子構造と内的整合性を検討する。また、構成概念妥当性を検証するために、体型不満足感、身体醜形懸念、メディアの内在化、食行動異常、自尊心、ウェルビーイングとの関連を検討する。さらに、食行動異常、自尊心、ウェルビーイングにおいて、日本語版BAS-2が身体不満足感(体型不満足感、身体醜形懸念)を上回る説明力をもつかどうかを検証し、増分妥当性の検討とする。

方法

調査対象者と手続き 関東地方の国立大学1校と私立大学5校の学生738名が調査に参加した。そのうち、いずれかの尺度の回答率が20%以下だった20名と、回答態度を測定する項目(「あなたが注意を払っていると分かるように、この項目には回答しないでください」)3つのうち少なくとも1つに誤って回答した44名のデータを除き、最終的に674名(男性313名、女性361名、平均年齢19.25歳、 $SD = 2.62$)を分析対象とした。

調査の概要は、質問紙の表紙および口頭での説明を行い、回答をもって同意を得たものとした。なお、本質問紙の題目は、回答への構えを最小限に抑えるため、および研究の概要を簡潔に表すため、「ボディイメージと幸福感に関するアンケート調査」とした。本調査は、筑波大学人間系研究倫理委員会の承認を受けて実施された。

測定内容 測定に使用した尺度は下記である。なお、各尺度の呈示順序は回答者間でランダム化した。

1. 日本語版BAS-2作成のために、「次の質問について、どれくらいあなたにあてはまるかを『全くない』『まれに』『ときどき』『よく』『いつも』から選んで答えてください」という教示文の後に、原尺度 (Tylka & Wood-Barcalow, 2015a) を翻訳した10項目について、5件法(「1. 全くない」、「2. まれに」、「3. ときどき」、「4. よく」、「5. いつも」)で回答を求めた。原尺度は1因子10項目で構成され、十分な信頼性・妥当性が報告されている (Tylka & Wood-Barcalow, 2015a)。翻訳にあ

Table 1
平均, 標準偏差, t 値, Cohen の d

	男		女		性別	
	M	SD	M	SD	t	d
1	2.90	1.16	2.64	1.10	2.93 **	0.23
2	2.51	1.12	2.14	0.97	4.63 ***	0.36
3	3.00	1.16	2.83	1.46	1.64	0.13
4	2.81	1.15	2.45	1.06	4.23 ***	0.33
5	3.05	1.24	2.86	1.07	2.11 *	0.16
6	2.55	1.20	2.30	1.11	2.84 **	0.22
7	3.11	1.18	2.79	1.16	3.51 ***	0.27
8	2.71	1.16	2.84	1.18	-1.50	0.12
9	2.69	1.16	2.45	1.11	2.79 **	0.22
10	1.98	1.01	1.75	0.94	3.10 **	0.24
合計得点	27.29	8.81	25.09	8.25	3.31 **	0.26

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

たっては、原著者の 1 人である Tylka の許可を得た。翻訳を職業とする専門家 4 名（英語を母国語とする翻訳家の男女各 1 名、および日本語を母国語とする翻訳家の男女各 1 名）に依頼し、原尺度の項目を日本語に翻訳した。日本語訳の結果を踏まえ、心理学を専門とする大学教員 2 名（このうち 1 名は日英のバイリンガル）、および大学院生 4 名が表現の統一などを協議した。次に、前述の 4 名の翻訳家とは別の翻訳家 4 名（英語を母国語とする翻訳家の男女各 1 名、および日本語を母国語とする翻訳家の男女各 1 名）にバックトランスレーションを依頼した。バックトランスレーションの結果を原著者に送り、原尺度と意味の相異がないことの確認を得た。

2. 体型不満足感を測定するために、Body Shape Questionnaire (Cooper, Taylor, Cooper, & Fairbum, 1987; 日本語版: 米良他, 2011) を用いた。全 34 項目について、6 件法にて回答を求めた。なお本調査では、男性にも調査を実施するため、項目番号 9, 12, 25 の「女性」という表現を「人」に変更して実施した。

3. 身体醜形懸念を測定するために、Body Image Concern Inventory (Littleton, Axsom, & Pury, 2005; 日本語版: 田中・有村・田山, 2011) を用いた。全 19 項目について、5 件法にて回答を求めた。

4. メディアイメージの内在化を測定するために、Sociocultural Attitudes Towards Appearance Questionnaire -3R (以下、SATAQ-3R とする: Thompson et al., 2000; 日本語版: 浦上・小島・沢宮, 2015) を用いた。全 29 項目について、5 件法にて回答を求めた。

5. 食行動異常を測定するために、Eating Attitude Test-26 (以下、EAT-26 とする: Garner & Garfinkel, 1979; 日本語版: Mukai, Crago, & Shisslak, 1994) を用いた。全

26 項目について、6 件法にて回答を求めた。

6. 自尊心を測定するために、自尊感情尺度 (Rosenberg, 1965; 日本語版: 山本・松井・山成, 1982) を用いた。全 10 項目について 5 件法にて回答を求めた。なお、「もっと自分を尊敬できるようになりたい」という項目は、因子負荷量が低いことが報告されている (伊藤・小玉, 2005) ため、この項目を除いた 9 項目を分析に使用した。

7. ウェルビーイングを測定するために、Satisfaction with Life Scale (Diener, Emmons, Larsen, & Griffin, 1985; 日本語版: Uchida, Kitayama, Mesquita, Reyes, & Morling, 2008) を用いた。全 5 項目について、5 件法にて回答を求めた。

8. BMI (体重 (kg) / 身長² (cm²)) を算出するために、フェイスシートにおいて身長と体重の記入を求めた。

結果と考察

以下、データの統計処理は SPSS Statistics 22 と SPSS Amos 22 を用いて行われた。

記述統計とその性差 日本語版 BAS-2 の各 10 項目と全項目合計値の平均を Table 1 に示す。項目 8 を除いて、すべての項目と全項目合計値において、女性よりも男性の方が高い値を示した。男女の差について t 検定を行った結果、項目 3 と項目 8 以外のすべての項目において男女の差は有意であり、小さい効果量を示した。

因子構造 日本語版 BAS-2 の因子構造を確認するために、原尺度と同じく、10 項目 1 因子構造のモデルを設定し、確認的因子分析を行った。また、性別によって異なる因子構造が得られる可能性が考えられたため、性別ごとに分析を行った。男性データでは、十分な適合度を得られた。女性データでは、男性データ

Table 2
確認的因子分析における各モデルの適合度

モデル	df	χ^2	CFI	RMSEA	SRMR
男性	21	33.074	.993	.043	.023
女性	21	52.913	.983	.065	.025
配置不変モデル	42	85.984	.988	.040	.023
測定不変モデル	51	102.853	.986	.039	.032

Table 3
確認的因子分析における各モデルの因子負荷量

項目	因子負荷量		
	男	女	全データ
1. 自分の身体を尊重している。	.76	.69	.73
2. 自分の身体のことをよいと感じている。	.88	.77	.82
3. 自分の身体にも少しはよいところがあると感じている。	.84	.58	.69
4. 自分の身体に肯定的である。	.81	.78	.80
5. 自分の身体が必要とすることに注意を払っている。	.61	.60	.61
6. 自分の身体に対して愛情を感じる。	.82	.80	.81
7. 自分の身体の個性的で他人と異なる部分を受け入れている。	.58	.68	.64
8. 自分の身体に対する肯定的な姿勢が行動に表れている。 例：顔を上げて、笑顔を見せる。	.60	.62	.59
9. 自分の身体が心地よい。	.76	.80	.78
10. メディアで目にする魅力的な人々のイメージ（モデル、女優・俳優など） と異なっても、自分は美しいと感じる。	.62	.71	.67

よりもやや低いものの十分な適合度を示した (Table 2)。男性データと女性データ、全データの因子負荷量を Table 3 に示した。

次に、男性と女性双方において同一内容を測定できているかどうかを確かめるために、性別による多母集団同時分析を行った。男性データと女性データそれぞれの因子負荷量について等値制約を置かない配置不変モデルと等値制約を置く測定不変モデルを比較した。その結果、RMSEA においては配置不変モデルよりも測定不変モデルの方が良好な適合を示した。一方、CFI と SRMR においては配置不変モデルよりも測定不変モデルの方適合度が不良であったものの、その差は CFI において .002、SRMR において .009 であり、Chen (2007) が提唱した $\Delta CFI \leq .015$ 、 $\Delta SRMR \leq .030$ という基準を満たしている。また、配置不変モデルと測定不変モデルの各適合度指標はいずれも経験的基準に達している。

以上の結果から、原尺度と同じく、10 項目 1 因子構造のモデルが、男性データと女性データ両方において適合し、かつ、男性と女性双方において同一内容を測定できていることが確かめられた。

BMI との相関 日本語版 BAS-2 と BMI の相関は男性においては $r = .11$ ($p < .05$)、女性においては $r = -.08$

(*ns*) であった。なお、BMI と日本語版 BAS-2 が曲線関係である可能性を考慮し、BMI² との相関も算出したが、男性においては $r = .10$ (*ns*)、女性においては $r = -.08$ (*ns*) であった。

内的整合性 内的整合性の観点から日本語版 BAS-2 の信頼性を検討するために、クロンバックの α 係数を算出した。その結果、男女合計データにおいて .91 (Table 4)、男性において .91、女性において .92 と十分な値が得られた。各項目の相関の範囲は男性において .34 — .76、女性において .30 — .73 であった。

構成概念妥当性 日本語版 BAS-2 と他の尺度とのピアソンの積率相関係数を算出した (Table 4)。その結果、女性データにおいては、ボディ・アプリシエーションと自尊心やウェルビーイングとの無相関仮説の検定結果は統計的に有意であり、正の相関が認められ、体型不満足感や身体醜形懸念、メディアの内在化、食行動異常との無相関仮説の検定結果は統計的に有意であり、負の相関が認められた。一方で、男性データにおいては、自尊心やウェルビーイングとの無相関仮説の検定結果は統計的に有意であり、正の相関が認められ、体型不満足感や身体醜形懸念との無相関仮説の検定結果は統計的に有意であり、負の相関を示したものの、メディアの内在化と食行動異常との無相関仮説の

Table 4
他尺度との相関係数

尺度	α	範囲	M (男)	SD (男)	1	2	3	4	5	6	7
1. BAS	.91	1-5	2.73	0.88	-	-.17 **	-.24 ***	.05	.02	.58 ***	.47 ***
						(304)	(305)	(306)	(306)	(305)	(308)
2. 体型不満足感	.97	1-6	1.66	0.79	-.37 ***	-	.60 ***	.28 ***	.60 ***	-.27 ***	-.09
					(352)		(305)	(306)	(306)	(305)	(308)
3. 身体醜形懸念	.94	1-5	1.84	0.72	-.37 ***	.70 ***	-	.36 ***	.49 ***	-.47 ***	-.29 ***
					(355)	(350)		(308)	(308)	(307)	(310)
4. メディアの内在化	.95	1-5	2.21	0.80	-.20 ***	.54 ***	.58 ***	-	.41 ***	-.02	-.02
					(358)	(353)	(358)		(309)	(308)	(311)
5. 食行動異常	.84	1-6	1.67	0.43	-.19 ***	.66 ***	.59 ***	.48 ***	-	-.17 **	-.02
					(348)	(343)	(348)	(351)		(308)	(311)
6. 自尊感情	.89	1-5	3.22	0.87	.58 ***	-.32 ***	-.44 ***	-.23 ***	-.20 ***	-	.59 ***
					(356)	(351)	(356)	(359)	(349)		(310)
7. ウェルビーイング	.83	1-5	2.87	0.89	.47 ***	-.26 ***	-.30 ***	-.12 *	-.16 **	.63 ***	-
					(358)	(353)	(358)	(361)	(351)	(359)	
M (女)					2.51	2.74	2.47	2.97	2.10	3.11	2.92
SD (女)					0.83	1.02	0.78	0.82	0.58	0.83	0.80

注1) 女性の値は対角線の下部, 男性の値は対角線の上部に記載した。範囲は, 尺度得点の範囲のことである。

注2) 各尺度の平均値は, 合計得点の平均値を項目数で除した値に記載した。

注3) () 内に n を記載した。

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 5
階層的重回帰分析の結果

独立変数	食行動異常		自尊心		ウェルビーイング	
	β	ΔR^2	β	ΔR^2	β	ΔR^2
Step 1		.47 ***/.39 ***		.19 ***/.22 ***		.09 ***/.09 ***
体型不満足感	.51 ***/.48 ***		.07/.04		-.01/.14 *	
身体醜形懸念	.27 ***/.24 ***		-.30 ***/-.38 ***		-.14 */-.27 ***	
Step 2		.01 */.02 **		.20 ***/.23 ***		.15 ***/.17 ***
ボディ・アプリシエーション	.10 */.15 **		.49 ***/.49 ***		.42 ***/.43 ***	
R^2		.48/.41		.39/.45		.24/.27
調整済み R^2		.47/.40		.39/.44		.23/.26

注) スラッシュの左側が女性のデータ, 右側が男性のデータである。 β は Step 2 での値を示した。

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

検定結果は統計的に有意でなく, 無相関であった。したがって, 女性においては, ポジティブボディイメージの高さはメディアの内在化の低さや食行動異常の低さと関連する一方で, 男性においては, ポジティブボディイメージの高さはメディアの内在化や食行動異常とはほとんど関連がないことが示唆された。

増分妥当性 ボディ・アプリシエーションが身体不満足感(体型不満足感と身体醜形懸念)を超えた説明力をもつかどうかを検討するために, 食行動異常, 自

尊心, ウェルビーイングのそれぞれを従属変数とし, 男女別に階層的重回帰分析を行った (Table 5)。Step 1 で体型不満足感と身体醜形懸念を, Step 2 でボディ・アプリシエーションを投入した。なお, 多重共線性の診断を行った結果, すべての変数において $VIF < 1.82$ であったため, 問題はないと判断した。

分析の結果, いずれの指標においても Step 1 から Step 2 にかけての説明率の増分は有意であり, また, Step 2 におけるボディ・アプリシエーションの偏回帰

係数も有意であった。したがって、ボディ・アプリシエーションは食行動異常、自尊心、ウェルビーイングのそれぞれにおいて、身体不満足感（体型不満足感と身体醜形懸念）を上回る独自の関連をもつことが示された。

研究 2

目的

日本語版 BAS-2 の再検査信頼性を検討する。

方法

調査対象者と手続き 調査1の参加者のうち94名（男性38名、女性56名）に3週間間隔を空けて再調査を行い、日本語版 BAS-2 に回答を求めた。調査回答者の対応付けは、電話番号の下5桁の記入を求めることによって行った。本調査は、筑波大学人間系研究倫理委員会の承認を受けて実施された。

結果と考察

日本語版 BAS-2 の再検査信頼性を検討するために、3週間間隔を空けて行った2時点における調査間の級内相関係数を算出した。その結果、男性において.82、女性において.94であり、強い正の相関が認められた（いずれも $p < .001$ ）。したがって、日本語版 BAS-2 は、十分な再検査信頼性をもっていることが確認された。

総合考察

本研究の目的は、日本語版 BAS-2 を作成し、その信頼性と妥当性を検討することであった。調査を通じて、日本語版は原尺度と同様に1因子10項目で構成され、男女両方において同一の内容を測定できていることが明らかになった。また、十分な内的整合性と再検査信頼性をもっており、基準関連妥当性も体型不満足感、身体醜形懸念、メディアの内在化、食行動異常、自尊心、ウェルビーイングとの関連が示された。また、増分妥当性を検討した結果、日本語版 BAS-2 は、食行動異常、自尊心、ウェルビーイングにおいて、身体不満足感（体型不満足感、身体醜形懸念）を上回る独自の説明力をもっていることも示された。以上のことから、本研究によって作成された日本語版 BAS-2 は、十分な信頼性・妥当性を備えていると判断された。

ただし、本研究では、原尺度とは異なる結果がいくつか得られた。第一は、日本語版 BAS-2 の尺度得点の低さである。原尺度の BAS-2 の項目平均は男性において3.82 ($SD=0.72$)、女性において3.61 ($SD=0.82$)であった。一方、本研究での日本語版 BAS-2 の項目平均は男性において2.73 ($SD=0.88$)、2.51 ($SD=0.83$)であった。したがって、本研究の結果は原尺度の結果よりも平均点が大幅に低い。このような結果が得られ

た背景には、日本人の自己卑下傾向（村本・山口、2003）があると考えられる。日本人は匿名性が確保されている実験室でも自己卑下の傾向を示すという報告（鈴木・山岸、2004）もあるが、匿名性が確保された本研究でもやはり、自己卑下傾向が表れた可能性がある。ただし、上述の考察はあくまで推測にすぎず、自己卑下傾向の影響を排除してもなお日本人のポジティブボディイメージが低い可能性もあるため、今後のさらなる研究が必要である。

第二は、BMI との相関である。原尺度では男女とも BMI との無相関仮説の検定結果は統計的に有意であり、正の相関が認められた。一方、本研究において、男性では無相関仮説の検定結果は統計的に有意であり、正の相関が認められたが、女性では検定結果は統計的に有意でなく、無相関 ($r = -.08, ns$) であった。このことから、日本人女性において、BMI はポジティブボディイメージと関連がないことが示唆された。この結果より、日本人女性は、自己の体型の認識が歪んでしまう「ボディイメージの歪み」が大きい可能性が推測される。このことは、BMI 判定でやせ群であっても、自分が太っていると認識しているものは33.3%、普通であると認識しているものは50.0%であり、普通群に属するもので、太っていると認識するのは81.6%である（平野、2002）という報告によって裏付けられる。よって、日本人女性においては、BMI の高低よりもボディイメージそのものがより重要であると考えられる。これに対し、男性では無相関仮説の検定結果は統計的に有意であり、正の相関が認められた ($r = .11, p < .05$) ことから、日本人男性は BMI が低く、やせていると、ポジティブボディイメージが低くなるということが示唆された。このように原尺度と異なる結果が得られたのは、BMI に「やせ」と「たくましさ」が混在しているためであると考えられる。日本人男性は「筋肉があり、かつ細身の身体」を理想とすると示唆されている（浦上・小島・沢宮・坂野、2009）が、BMI 値だけでは、体脂肪率や筋肉量について把握することはできない。そのため、日本人男性のボディイメージについて BMI 値のみで論じることは難しいと考えられ、今後は BMI 値のみではなく、「やせ」と「たくましさ」両方を扱う必要があるだろう。なお、本研究では、無相関仮説の検定結果は統計的に有意であり、正の相関が認められていたが、値そのものは低く、今後さらなる検証が必要である。

第三は、男性における他尺度との相関である。構成概念妥当性の検討において、原尺度では、男女ともにポジティブボディイメージの高さはメディアの内在化の低さや食行動異常の低さと関連するという結果が得られていた。しかし、本研究では、男性において、ポジティブボディイメージをもつことはメディアの内在化や食行動異常とはほとんど関連がないことが示唆さ

れた。メディアの内在化については、使用した尺度の限界もあるかもしれない。本研究で使用した SATAQ-3R は、純粋に一般的なメディアの影響のみを扱い、家族や友人の影響を扱っておらず、また、「やせ」や「たくましさ」の理想像の内在化を明示的に扱っていないという批判がある (Schaefer et al., 2015)。そのため、本研究で扱ったメディアの内在化は限定的であったと考えられ、今後はより広くメディアの内在化を扱う必要があるだろう。食行動異常については、男性の場合、プロテインやエネルギー補給サプリメントを使用する (五十嵐・杉本・西村, 2011) など、拒食や過食とは異なる食行動異常が存在する可能性がある。しかし、本研究で使用した EAT-26 には、それらの食行動は含まれておらず、測定することができなかった。今後の研究においては、これらの可能性を踏まえ、より詳細に検討されることが望まれる。

上記のような相違点は存在するものの、それらは日本語版 BAS-2 の信頼性・妥当性に疑問を投げかけるものではなく、むしろ本研究によって日本語版 BAS-2 の十分な信頼性と妥当性が示されたと考えられる。また、日本語版 BAS-2 は、身体不満足感 (体型不満足感、身体醜形懸念) を上回る独自の説明力をもっていることも示された。すなわち、ボディ・アプリシエーションは身体不満足感の単なる対概念ではなく、それらとは異なる独自の説明力を有すると考えられる。したがって、本研究によって、従来のボディイメージに関する研究では捉えきれなかった側面を扱うことが可能になり、日本国内におけるボディイメージ研究のさらなる発展に寄与することができるだろう。日本語版 BAS-2 は、ポジティブボディイメージを包括的かつ簡便に測定できる尺度として、有益なツールとなるだろう。

引用文献

- Andrew, R., Tiggemann, M., & Clark, L. (2015). The protective role of body appreciation against media-induced body dissatisfaction. *Body Image, 15*, 98–104.
- Atari, M., Akbari-Zardkhaneh, S., Mohammadi, L., & Soufiabadi, M. (2015). The factor structure and psychometric properties of the Persian version of Body Appreciation Scale. *American Journal of Applied Psychology, 3*, 62–66.
- Avalos, L., Tylka, T. L., & Wood-Barcalow, N. (2005). The Body Appreciation Scale: Development and psychometric evaluation. *Body Image, 2*, 285–297.
- Brown, T. A., Cash, T. F., & Mikulka, P. J. (1990). Attitudinal body-image assessment: Factor analysis of the Body-Self Relations Questionnaire. *Journal of Personality Assessment, 55*, 135–144.
- Cash, T. F. (2002). Cognitive-behavioral perspectives on body image. In T. F. Cash & T. Pruzinsky (Eds.), *Body image: A handbook of theory, research, and clinical practice* (pp. 38–46). New York: Guilford Press.
- Cash, T. F., Jakatdar, T. A., & Williams, E. F. (2004). The Body Image Quality of Life Inventory: Further validation with college men and women. *Body Image, 1*, 279–287.
- Chen, F. F. (2007). Sensitivity of goodness of fit indexes to lack of measurement invariance. *Structural Equation Modeling, 14*, 464–504.
- Cooper, P. J., Taylor, M. J., Cooper, Z., & Fairbum, C. G. (1987). The development and validation of the Body Shape Questionnaire. *International Journal of Eating Disorders, 6*, 485–494.
- Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S. (1985). The satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment, 49*, 71–75.
- Franzoi, S. L., & Shields, S. A. (1984). The Body Esteem Scale: Multidimensional structure and sex differences in a college population. *Journal of Personality Assessment, 48*, 173–178.
- Garner, D. M., & Garfinkel, P. E. (1979). The Eating Attitudes Test: An index of the symptoms of anorexia nervosa. *Psychological Medicine, 9*, 273–279.
- Gillen, M. M. (2015). Associations between positive body image and indicators of men's and women's mental and physical health. *Body Image, 13*, 67–74.
- Halliwell, E. (2013). The impact of thin idealized media images on body satisfaction: Does body appreciation protect women from negative effects? *Body Image, 10*, 509–514.
- 平野 和子 (2002). 女子学生のボディイメージとダイエット行動について 神戸文化短期大学研究紀要, 26, 1–12.
- 五十嵐 哲也・杉本 希映・西村 大樹 (2011). 日本版「たくましさ希求」尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 カウンセリング研究, 44, 158–166.
- 伊藤 正哉・小玉 正博 (2005). 自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74–85.
- Littleton, H. L., Axsom, D., & Pury, C. L. (2005). Development of the body image concern inventory. *Behaviour Research and Therapy, 43*, 229–241.
- Lobera, I. J., & Rios, P. B. (2011). Spanish version of the Body Appreciation Scale (BAS) for adolescents. *Spanish Journal of Psychology, 14*, 411–420.
- Mukai, T., Crago, M., & Shisslak, C. M. (1994). Eating attitudes and weight preoccupation among female high school students in Japan. *Journal of Child Psychology and Psychiatry, 35*, 677–688.
- 村本 由紀子・山口 勲 (2003). 「自己卑下」が消えるとき——内集団の関係性に応じた個人と集団の成功の語り方—— 心理学研究, 74, 253–262.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Schaefer, L. M., Burke, N. L., Thompson, J. K., Dedrick, R. F., Heinberg, L. J., Calogero, R. M., ... Anderson, D. A. (2015). Development and validation of the Sociocultural Attitudes Towards Appearance Questionnaire-4

- (SATAQ-4). *Psychological Assessment*, 27, 54–67.
- Secord, P. F., & Jourard, S. M. (1953). The appraisal of body-cathexis: Body-cathexis and the self. *Journal of Consulting Psychology*, 17, 343.
- 柴田 利男 (1990). 青年期の身体満足度が対人不安および自己開示行動に及ぼす影響. *心理学研究*, 61, 123–126.
- 鈴木 直人・山岸 俊男 (2004). 日本人の自己卑下と自己高揚に関する実験研究. *社会心理学研究*, 20, 17–25.
- Swami, V., & Chamorro-Premuzic, T. (2008). Factor structure of the Body Appreciation Scale among Malaysian women. *Body Image*, 5, 409–413.
- Swami, V., & Jaafar, J. L. (2012). Factor structure of the Body Appreciation Scale among Indonesian women and men: Further evidence of a two-factor solution in a non-Western population. *Body Image*, 9, 539–542.
- Swami, V., Mada, R., & Tovée, M. J. (2012). Weight discrepancy and body appreciation of Zimbabwean women in Zimbabwe and Britain. *Body Image*, 9, 559–562.
- Swami, V., Ng, S. K., & Barron, D. (2016). Translation and psychometric evaluation of a Standard Chinese version of the Body Appreciation Scale-2. *Body Image*, 18, 23–26.
- Swami, V., Stieger, S., Haubner, T., & Voracek, M. (2008). German translation and psychometric evaluation of the Body Appreciation Scale. *Body Image*, 5, 122–127.
- 田中 勝則・有村 達之・田山 淳 (2011). 日本語版 Body Image Concern Inventory の作成. *心身医学*, 51, 162–169.
- Thompson, J. K., Heinberg, L., Altabe, M., & Tantleff-Dunn, S. (1999). *Exacting beauty: Theory, assessment, and treatment of body image disturbance*. Washington, DC: American Psychological Association.
- Thompson, J. K., Van den Berg, P. A., Keery, H., Williams, R., Shroff, H. M., Haselhuhn, G. I., & Boroughs, M. (2000). A revision and extension of the Sociocultural Attitudes Towards Appearance Questionnaire. *Presented at the 9th Annual Conference of the Academy of Eating Disorders* (NY, USA), 2004.
- Tylka, T. L., & Wood-Barcalow, N. L. (2015a). The body appreciation scale-2: Item refinement and psychometric evaluation. *Body Image*, 12, 53–67.
- Tylka, T. L., & Wood-Barcalow, N. L. (2015b). What is and what is not positive body image? Conceptual foundations and construct definition. *Body Image*, 14, 118–129.
- Uchida, Y., Kitayama, S., Mesquita, B., Reyes, J. A. S., & Morling, B. (2008). Is perceived emotional support beneficial? Well-being and health in independent and interdependent cultures. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 34, 741–754.
- 浦上 涼子・小島 弥生・沢宮 容子 (2015). メディアの利用と痩身理想の内化化との関係. *教育心理学研究*, 63, 309–322.
- 浦上 涼子・小島 弥生・沢宮 容子・坂野 雄二 (2009). 男子青年における痩身願望についての研究. *教育心理学研究*, 57, 263–273.
- 山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造. *教育心理学研究*, 30, 64–68.
- 米良 貴嗣・岡 孝和・宮田 正和・兒玉 直樹・森 秀和・玉川 葉子…辻 貞俊 (2011). Body Shape Questionnaire と Body Attitudes Questionnaire 日本語版の作成と、それを用いた日本人摂食障害患者の身体イメージの評価. *心身医学*, 51, 151–161.